

渡辺雅男著

『階級！社会認識の 概念装置』

評者：馬場宏二

志や壮とすべし。されど…と言いたくなる本である。ひとまず構成を見る。

まえがき グローバリゼーションの中の階級

序章 階級論の復位

第Ⅰ部 現代日本における階級の発見

第一章 労働者階級の発見

第二章 資本家階級の発見

第三章 中間階級の発見

第Ⅱ部 階級論の古典的伝統

第四章 マルクスにおける階級概念

第五章 ヴェーバーにおける階級概念

すでにこの構成が本書の二面性を表現しているかも知れない。すぐ気付くことだが、構えは大きく魅力的なのに、どこか危なっかしいところがある。階級論の復位をと唱えながら、実態論が先に出ていて、概念論が後から来る形である。グローバリゼーションを標榜しながら、扱っているのは日本の実態だけらしい。それでは実際の叙述が、この種の不安を解消するようになっていくか。

「まえがき」で、グローバル化時代の階級論の必要性を説く。第一に、この時代の階級とは

グローバルな規模で再編されている階級構造である。福祉国家や大量消費や普遍的シテイズンシップのもとにある先進国の労働者階級もグローバル経済へ日々参入を続けている途上国や最貧国の労働者階級も、ともに含むが、彼ら内部のあるいは相互の格差や分断が多様に存在するにもかかわらず「グローバルな労働者階級としての運命の共同性が客観的に存在していることは否定しようがない」。だから階級論が要ると言うわけである。第二にこの時代の階級闘争は、全面衝突の正規戦でなく散発的なゲリラ戦で戦われる。議会外闘争、議会内闘争と複雑な形態が、階級関係の制度化を背景とする階級闘争の制度化によってさらに複雑化された。時に犯罪の増加の形さえとる。多様だからこそ概括的に把握する必要があると言いたいのである。

「運命の共同性」が自明なら階級論復位の必要も自明である。ところがそれは存在すると宣言されただけで現実態としては明示されず、直ちに複雑性の指摘に移っている。これではこの必要は、社会の現実的要求に基づくのではなく、著者の独断的主張に由来するだけかも知れない。——断っておくが評者は、可能なら階級論はきちんと説くべきだと考えており、頭から否定的なのではない。この痴呆症的細目主義化時代に、大議論を真向から振りかざす著者の姿勢には好意的なのである。だがそれが独断の羅列であっては空しい。

この不満は「序章」へ行ってもすぐには解消しない。ここでの論述の中心は、階級否定論だと著者が考える諸論者に対する論難である。伝わって来るのは、階級の存在を隠蔽する、心がワルいか頭のワルい社会学者が如何に多いかと言う学問状況論であって、階級はどこを押さえ

れば正しく把握でき、グローバル化に対する反立となり得るかという現実的な方法論ではない。対象はとりわけ日本の社会学者であるが、ここは妙にしつこくて、部外者には、左翼社会学者の内ゲバに見える。

ただ「序章」の中で、階級の暫定的定義が下される。「広義における階級とは、経済的な富、政治的な権力、文化的な威信、社会的な地位などの不平等に基づく社会関係（上下関係、支配服従関係）のもとにおかれた人間集団をさす」。狭義の階級とは、身分やカーストのように世襲的・閉鎖的でなく、近代的な市民社会のもので、もっぱら経済的不平等を基礎に成立する階級である、と。

抽象的概念としては解る。階級関係とは、経済的不平等に基づく人間集団同士の不平等関係だと言うのである。問題は、それでグローバル資本主義段階下の諸階級の具体像を捉える手掛かりを示したことになるかである。それは本書を通読してみても解らない。議論にピントのズレもあるが、それを含めて、階級の実態に関する叙述に、現実感がほとんど感じられないからである。

むしろ著者は概念論に熱心である。そのことは「社会認識の概念装置」なる副題からも判るし、実態分析の諸章の中で古典・諸説への言及が繰り返されることから判る。特に階級に関するマルクスの片言隻語の涉猟と弁護論的な解釈が目立つ。マックス・ヴェーバーについても、マルクスと両立すると、市民派的解釈を開陳する。この作業に、階級概念論史の一駒としての意味はあるだろう。

だが、先人の片言隻句を今日生かそうとするのであれば、彼らの理論の体系的把握が必要であるばかりか、彼らが対象とした歴史的事実についての知識が必要である。本書は時々歴史認識の不足を露呈する。つまり全体として、現状

についても史実についても、現実把握が足りないのである。グローバル化段階の階級論が必要だと振りかざしながら、それに該当する記述を全く飛ばして、第I部でいきなり現代日本階級論に入るのも、この現実把握不足に由来する、均衡感覚の欠如のせいであろう。

ここでは、少なくとも以下のような構図が必要だった。グローバリズムの元凶アメリカで、やっと出来た低位福祉国家を、レーガン登場以降の自由主義的反動の中で破壊し、貧民層の沈下を放置するとともに、投機を放任することによって一握りの株成金を生み出した。もともと経済的階級差と人種差とが斜めに交錯していたことと併せて、アメリカにおいてすらかつてない貧富の格差が生じたが、その中に瀬戸岡紘の言う、労働者層を含めた「中産市民」層が生まれ、グローバリズムの政治的基盤となった。他方、株成金達の利得のために「南」の諸国で資本の本源的蓄積が強行され、ごく一部に買弁階級が成立する傍ら、土地から切り放された大衆が、労働組合も社会保障も会社主義もない、剥き出しの商品経済と暴力のなかで路頭に迷うようになった。

アメリカの株成金と「南」諸国で非公式セクターに追い込まれた人々との間には、これが同じ人間かと疑いたくなるような生活条件の差が生じた。だからこの時代に階級論は有意なのだが、それを明らかにしたければ、ひとまずこうした世界的概観図のなかで日本がどのような位置を占めるのかを見た上で、日本内部の分析に入るのが真っ当な手続きであろう。仰々しく「グローバリゼーションの時代」などと振りかぶった挙げ句いきなり日本を「典型的なケース」と宣言して、論証ヌキで実態論全部を日本に限定してしまうのは、見え透いた羊頭狗肉である。

さて、第I部は現実像の提示なのに現実感に

乏しい。現実感が伝わるのは、資本家階級論中の、上流資本家間の、特に天皇家との通婚状況と、中間階級論中の零細企業主の投票行動の記述くらいのものである。前者は井戸端会談的話題だからここでは取り上げない。後者は得意とする領域の所産なのだろうが、人々は著者が言うほどに政策判断によって投票するのか。投票は候補者との人脈上の繋がりで行なわれるのではないか。だから小選挙区制によって固定的自民党選出区が特に農村的諸県に簇生するとともに、全国的に議員世襲が定着したのである。

しかし、第I部最大の問題は第一章の労働者階級論である。当然本書の山場をなす章と期待されるが、章として最短である上に、ここを読んでも、日本の労働者がどういう属性を持った人間集団なのか殆ど解らない。概念論の後に、内部格差の状況が羅列されるだけである。階級論の本場イギリスについてだと、評者のような在英体験のない人間にも労働者階級像が伝わって来る。内藤則邦『イギリスの労働者階級』もあり、映画の「小さな恋の物語」や「長距離ランナーの孤独」もあった。労働者階級は同じ地域に住み、通婚し、連帯意識を持つ。とりわけ母と結婚した娘との間に強い依存関係がある。他の階級とは、食事のマナーや使う言葉や親子関係に、どうかすれば顔つきや体格にさえ、階級が見分けられるほどの差がある。共通する生活様式のもとで集団独自の文化が世代的に再生産されていた。これが階級と言うものらしかった。

日本の労働者階級についてそうした感性的把握が出来るか。おそらくそれは、あっても曖昧であり、かなり見え難いのである。経済格差と人種差が交錯したアメリカでは、階級論に否定的な社会学が生まれた。日本で、氏原正治郎を初めとするマルクス経済学系の労働問題研究者が実態調査にのめり込んだのは、西洋古典から

学んだ「階級」を日本の中で何とか見出すためではなかったか。この分野の業績をあらかた無視し、その問題意識を共有したのかも知れない社会学者の内特に素朴な結論を導いた部分をひたすら罵り、あとはイデオロギー的に裁断するだけでは、日本における労働者階級の存在を実証したことにはならない。初めから労働者階級内部の格差などと逃げ路を作ってしまう前に、階級として共有する属性を手応えある形で提出しなければならなかった。

概念論に関して二・三注意しておく。まず、個人企業に比べて株式会社は「二人の自然人格によって所有と支配が別個に代表されている」(116ページ)とは、いささか素朴に過ぎる。会社の本質は所有者の複数化である。しかし会社は企業として統一性を維持しなければ自己増殖する価値体たる資本ではあり得ない。この本質を徹底的に外化した制度が株式会社であり、多数の有限責任株主の意思を一株一票原則で形式的に統一した株主総会が所有を代表し、その下に統一的経営を委任される経営者が選任される。大陸法系の合名会社・合資会社、イギリスのパートナーシップ・プライベートプレースメントといった中間的な企業形態もこの筋に沿って解釈し得る。その辺を丸ごと飛ばして、いきなり法人擬制説・法人実在説などと口走っても、ワカッテイルノカネ、と疑われるだけである。

これは単なる企業制度の問題ではない。資本家階級論としても、生産手段の所有者という抽象的規定だけで、相互の連帯や信用や競争や騙し合いといった資本家相互の関係に目が行っていないので階級論にならない。その一環として株式会社論が不完全になるのである。この辺りは宇野弘蔵以後の経済原論が、信用論→資本商品化論の筋でかなり議論を重ねたところだから、それを丸抜きしたのでは怠慢の謗りを免れ

ない。

会社に関わってもう一つ。「東インド会社の設立は1702年に東インド貿易の独占権を主張していたさまざまな会社が統合され、単一の会社すなわち東インド会社を形成したことに遡る」(230ページ)。これは著者自身の文だが、全く誤りである。イギリス東インド会社の設立が1601年、これに対抗して、七つの貿易企業を統合してもっと大きい持続企業であるオランダ東インド会社が設立されたのが1602年というのは、高校世界史級の常識である。著者はマルクスの東インド会社論をパラフレーズした積もりなのだろうが、実はマルクス自身がおかしいのである。そのことには、マルクスびいきの東インド会社史家達が気づいて困っている。ただマルクスは「東インド会社が真に始まった日付」を1702年と書いていたから、弁護の余地が僅かにあった。トーリー系の旧東インド会社に対抗してホイッグ系の新東インド会社が設立されたのが1698年、両社が協定して平等の立場で東インド貿易に参入するようになったのが1702年で、1709年に両社は合併する。だからマルクスが1702年を上げたのは協定の年だと強弁すれば弁護したことにはなる。しかしおそらくこれはマルクスが1709年と混同したのである。彼が数字と地名に弱いことは、すこし注意して読んで経験のあるものは気付いている。著者がマルクスのかような短文まで涉猟したことは評価して良いが、この種の文を独断的解釈のために無批判に使うのは素朴な教条主義だと言うしかない。

同様な歴史知識の不足は、ヴェーバーの「支配の二類型」の解釈にも見られる。ここで描かれているのは銀行と産業の癒着やカルテル→シンジケートの関係など、かつてのドイツ独占組織そのものである。それは宇野『経済政策論』や戸原四郎『ドイツ金融資本の成立過程』で、

発展段階論の常識になっていた。その知識がないため、著者はこれを何か抽象的な支配概念論と解してしまった。

ヴェーバーに関わってもう一つ。著者はヴェーバーをマルクスと補完的だと言いたがる。いわゆる市民社会派、別名マルクス＝ヴェーバー派に共通する姿勢だが、ヴェーバーがマルクスあるいはマルクス学派に強烈な対抗意識を持って作文していたことは、私のようなヴェーバー知らずでも気付く。マリアンネのヴェーバー伝には、有名な「プロ倫」がマルクス批判のつもりの文章だったことが述べられているし、それがなくとも、ここの階級論におけるヴェーバーの意識重視や方法的個人主義傾向が反唯物史観の意図によると考えると極めて解り易くなる。ギデンズ『先進社会の階級構造』も対抗説である。著者がこんなに立脚点の近い先行研究をなぜ完全無視したのか不思議だったが、第Ⅱ部第四章第五章を読んで見て、あるいはギデンズはマルクス＝ヴェーバー派にとっては不都合な存在だったかと気づいた次第である。

細かいアラ探しをしたつもりはない。その気になれば拾うべきアラはまだまだいくらかもあるのだが、それを並べても生産的ではない。評者は、会社主義論に対して無理解な論難を浴びせられているのだが、その割には好意的なのである。本書のような正面切った大議論は近時の社会科学の細目主義傾向に対する歯止めになるかも知れないからである。階級論にしても、かつて良い手掛かりを得ていれば自らのめり込んだかも知れない分野だった。実はこの本の書評を引き受けたのも、今からでも新しい手がかりが得られるかとの期待があったのことだったが、期待はあらかた外れた。それでも収穫皆無だったとまでは言わずにおく。著者にはもう少し謙虚に事実、特に歴史的事実に関する知識を積んで出直してもらいたい。せっかくの力作、

左翼社会学者間の内ゲバに終わらせては詰まらないではないか。(2005年6月26日)
(渡辺雅男著『階級！社会認識の概念装置』彩

流社, 2004年1月刊, 286+24頁, 定価3,000円+税)

(ばば・ひろじ 東京大学名誉教授)

CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)マニユアル 労働と健康の調和

越河六郎
藤井 亀 著

健康は各個人の問題ではあるが、職場の健康管理というときには、当該職場の組織制度や労働との関連をより直接的にとりあげるべきだと考える。予防的視点とはまさにこのことであり、広く労務管理の段階でもある。さしあたって、職場の様子を調べる必要がある。CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)は、その一つのスケールとして作成したものであるが、出来合いのものとしてではない使い方の検証のために長い期間を要した。

A5・286頁/3,990円

産業保健専門職のための 生涯教育ガイド

―付録・日本産業衛生学会 産業保健専門職倫理指針―

日本産業衛生学会 生涯教育委員会 編

A5判・1113頁・5000円

国際的にも大きな転換期にある産業保健業務。企業経営と一体となった労使によるマネジメントシステムの取り組みが求められる。新時代にふさわしい産業医、産業看護職、産業衛生関連技術の生涯研修の内容を一六ステップでわかりやすく示したガイドライン。

心理学の理解

井上枝一郎 編

A5・300頁/2310円

心理学をこれから学ぼうとする人のための入門書

主要目次…心理学の概観/情報を受容と認識/人の情報処理/知識の構造/環境と行動/発達を知る/個人の内面の世界/人間相互の関係/ヒューマンエラーの話/暮らしと職場の心理学/心理学からのアドバイス

財団法人 労働科学研究所出版部

〒216-8501 神奈川県川崎市宮前区菅生2-8-14 TEL 044-977-2125 FAX 044-976-8190

E-mail: shuppan@isl.or.jp URL: http://www.isl.or.jp/ (価格は税込)

